福島民報
2010（平成22）年
6月13日
（日曜日）
発行所
福島民報社
福島市太田町13－17
（郵便番号960-8602）
郵便振替口座　02110－9－1158
電話代表　（024）531－4111
編集局531－4119　広告局531－4153
事業局531－4173　販売局531－4178
© 福島民報社 2010

大農京東と村川鮫

地域再生へ連携協定

東北初 30日締結 "知"結集し農業振興

鮫川村は東京農大と三十日に連携協定を結び、国内最高水準の技術を導入して中山間地の農業と地域再生に一体で取り組むことになった。同大は村内で全学レベルの実習・試験研究を展開し、地場産品の高付加価値化、耕作放棄地の解消、循環型農業の構築などに取り組む。村は研究・実習用地を提供するなどして協力する。蓄積されたノウハウは県内自治体にも提供する考えで、協定を契機にキャンパス誘致も目指している。中山間地の地域活性化のモデルとして注目されそうだ。

全学レベルで実習・試験研究

東京農大は全国十三自治体と同様の協定を結んでおり、東北では鮫川村が初。協定には特産品開発、循環型農業、山村環境の整備と再生、地域再生や活性化に向けた人材の育成・教育、伝統文化の維持、遊休荒廃農地の再生などを盛り込む。同大は農学、応用生物科学、地域環境科学、国際食料情報学、生産産業学、短期大学の六学部二十一学科に学生一万三千人が在籍しており、各学部の専門知識や最先端技術を投入して各事業を進める。

特産品開発では、村特産の大豆をはじめ、コメ、トマトなどの有機栽培野菜の収量増や品質向上策、醸造など同大が持つ最先端技術を導入した酒類や食酢の研究開発などを計画。循環型農業や山村環境の整備では、生態系に配慮した景観整備にも取り組み、グリーンツーリズムなど観光資源の創出も目指す。

教授、学生らは村営やNPO法人などの体験・宿泊施設に滞在しながら活動する。年間延べ三千人程度が村内入りする見通し。村は実習・試験研究の場となる山林や農地を住民の理解を得て無償で提供するほか、研究機材の整備も補助する。村との調整役を担う館博同大短期大学部長は「鮫川村を大学の研究フィールドに位置づけ、全力で村を支援する」との考えを示す。大楽勝弘村長は「専門的な指導を受け、村発展につなげたい」としている。

村は視察を受け入れるなどして成果を他の自治体にも還元する考えで、県は「農村振興のモデルとして県内全域への波及効果が期待できる」（農林水産部）としている。

村と同大は平成十二年度から景観保全活動などを通して交流している。同大は、農業者の高齢化や担い手不足などの課題を抱える中で、大豆栽培で生産者の大豆を買い取り、特産品開発を進めるなど、村の意欲的な取り組みに注目し、新たな連携先に決めた。村は今後、同大との連携、交流を深めながら「鮫川キャンパス」の実現にも取り組みたいとしている。

東京農大は平成十六年から自治体との連携協定を進めている。鮫川村は静岡県富士宮市、長野県長和町、新潟県佐渡市などに続き十四カ所目。富士宮市では地元の食資源を生かした産業振興に取り組み、成果を挙げているという。

熱波到来、涼恋し

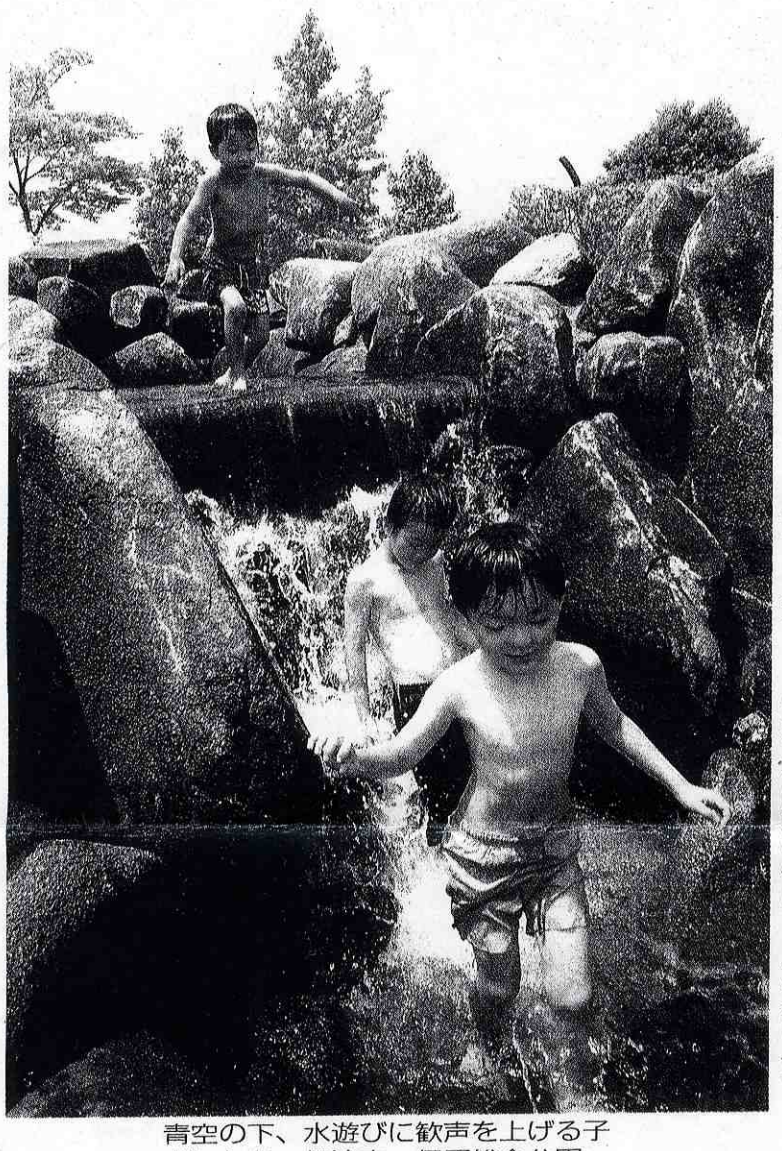
福島、若松で真夏日

十二日の県内は高気圧に覆われ、南からの暖かい空気も入り込んで各地で気温が上がった。福島市や白河市などは今年最高を記録した。

福島地方気象台によると、福島市は三一・六度、郡山市は二九・八度、会津若松市は三三度、いわき市小名浜は二四・〇度。

〇・五度の真夏日となった。白河市は二九・伊達市保原町の保原総合公園では、子どもたちが涼を求めて水遊びを楽しんでいた。

十三日も晴れ間が広がり、気温が上昇する見込み。夕方からは曇り、にわか雨の降るところもありそう。



青空の下、水遊びに歓声を上げる子どもたち＝伊達市・保原総合公園

特別栽培米・純米酒のパイオニア
自然郷
(名)大木代吉本店　福島県矢吹町本町9　TEL0248(42)2161

福島民報ホームページ
http://www.minpo.jp/
読者センター 0120-803344